

## 第2期 地域福祉活動計画 第4回作業委員会記録

開催日時：平成27年9月29日（火）17:00～

会 場：2000年会館 会議室2

参加者：金田（佛教大学）、今中・岡本（県社協）  
植村・北嶋・藤岡・吉川（町社協）

本日の作業委員会は、策定委員有志+αにより上牧町の福祉課題について話し合うために開催した「つどい」の終了後に行った。主として「つどい」で提出された福祉課題に対する今後の展開について話し合われた。「つどい」の詳細については「つどい議事録」を参照のこと。

岡本氏 シニアカレッジは、高齢者の元気づくりの場、結果的には担い手づくりにつながるものとして位置づけようとの意見が出ていた。「楽まち」は、色々なアイデアを持っているので地域福祉活動計画について再度説明をして協働できる箇所を整理してみてもよい。

金田先生 ボランティアセンターについては、ボランティアの横のつながりがいないとのことであるが。ボランティアセンター開設の要件はあるのか。

岡本氏 特にないが、コーディネート機能の有無が重要。この機能がないとボランティアをしたいと思っている人がいても「社協の窓口に行けばいいよ」と言えるものがない。  
単なる活動のマッチングだけでなく、新たに活動したい人への対応も必要。  
(新しい活動の開拓)

金田先生 力のある人はシルバーカレッジで学んだ後も活動の場があるが、それ以外の人への出口づくりが必要。成果の見えるものを。  
一方で地域で暮らしづらさを感じておられる人に対して地域として何ができるかの方策はすぐには考えられない。個人的なネットワークで支えるのもいいが、上牧で支え合うためにどうしていくかを長めのスパンで考える。話し合うテーマの設定の仕方を考える必要がある。

### 【暮らしにくさを抱えた人への支援について】

岡本氏 引きこもりをテーマにした場合、引きこもりの人を外に出したいが出口がない。場所づくりが必要。

金田先生 「社会生活ができていないから外に出しましょう」というような簡単なことではない。  
子どもや高齢者、引きこもりなど対象はすべて。それぞれの分野で対応してしまうとまたそれも縦割りになってしまう。

岡本氏 引きこもり以外に狭間に落ちやすい課題があるのか考えることも必要なのではないか。地域のなかで引きこもりの人がたくさん認知されているのなら「引

きこもり」が上牧のテーマになる。

今中氏　そもそも「引きこもり」の定義があいまいなのでは。

金田先生　当事者を知るという機会をつくっていくことは、活動とマッチングしていく。当事者の語りを聞くと良いことも悪いことも理解につながる。

岡本氏　地域福祉計画でハード面が整うが、相変わらずその地域には住めないということが現実で起こっている。そういう意味での福祉的な理解をどうしていくか、思いがある人にどう参加してもらうかが重要。

金田先生　NPOの活動が計画にすべて反映するわけではないが、彼らの力が計画に影響していく。環境問題やバリアフリー等。

岡本氏　福祉当事者にとっての利便性がバリアフリーの関心につながる。ハード面を考えるときにも地域のつながりを考えることで発想が広がるという。

金田先生　わざと不便さをつくることで、一人では行けず誰かが手伝わないといけないという状況をつくって、皆が交流するようになる。そこで声かけもできる。こういう発想も必要かも知れない。

今中氏　事前に情報は集めた上で提案していく。

#### 【ボランティアセンターについて】

金田先生　ボランティアセンターでいうと、部屋の課題はあるが、部屋の設計をワークショップで考えるのはどうか。手作りの場所をボランティアの人と作る。よく言われるのが大学生との協働であるが、大学生と一緒に活動していく上で気をつけないといけないことは、大学生が入れば盛り上がるが必ずしも良いものができるとは限らない。地域が学生に声をかけるとき、学生に力を発揮してほしいところをあいまいにしておくのはよくない。その場は楽しいが、それだけではいけない。外からの力の借り方も考えないといけない。

岡本氏　先程の「つどい」では、見守り活動の話が出ていた。また、生活支援や引きこもりを含めたサロンだけでなく、居場所づくりの話が出ていた。担い手についてはシニア層にどう参加してもらうかの延長線上にシニアカレッジがある。ボランティアコーディネートをどうしていくか。学生をどこに組み込むか。等のテーマがある。

金田先生　学生については、「楽まち」のヒアリングで学生がワークショップに参加してよかったとの意見が出ていた。

植村氏　見守りや生活支援については、桜ヶ丘3丁目では見守りができていて、緑ヶ丘では生活支援ができています。緑ヶ丘でされている生活支援の仕組みづくりの

整備をして、それを見守り活動をしている桜ヶ丘3丁目にどう飛び火させるかを考えていく。その人達に集まってもらってプロジェクトを立ち上げることは可能か。

ボランティアセンターの機能でいうと情報集約や担当者の顔の見える関係が必要。「楽まち」と一緒にボランティアセンターを作ることはできるか。

岡本氏 実は既にボランティアセンター機能が存在しているということをアピールしていくことも一つの方法。ボランティアコーディネートは奥が深く、色々なサポートの仕方がある。看板を立ててニーズがたくさん寄せられることでボランティア機能が強化される。職員のスキルも求められて育つため、ひっそりやらなくてもいいのではないか。

金田先生 ボランティアセンターの看板を掲げることがゴールではない。ニーズはある。現状でもその役割は担っている。

北嶋氏 ボランティアセンターの看板を掲げたい。窓口だけでなく、ボランティアの集まる場を作りたい。

岡本氏 ボランティアセンターがある良さはエリアによって違う。必ずしもあるだけでいいわけではない。上牧でいうと活動していく上での相談は集まってくる。それを熟知できるので、ニーズに答えやすくなる。

藤岡氏 なにかしたいなという思いも収集しやすくなるのでは。看板があることで気軽にボランティアしたいと思って来てくれる良さもあるはず。

金田先生 地域活動、市民活動とは何かを上牧のなかで成熟させないといけない。ボランティアは制度の狭間を埋めるだけではない。穴埋めのボランティアという発想はなくし、地域での自立のためのボランティアの相談がボランティアセンターに入ってくるようにしないとイケない。それを伝えていかないと穴埋めのボランティアばかりとなる。

岡本氏 社協のなかにそういう機能を備えておく。社協が看板を掲げていきたいというなら、看板を立てるだけでなく、あり方も考えて外にださないといけない。ただ「やります」だけでは伝わらない。

金田先生 社協がボランティアセンターをするなら、活動の場を作り出したり、福祉に関心を持ってもらえるような福祉教育的な機能があれば意味が出てくるのでは。主担当はいるかもしれないが、社協内全体の底上げも必要。

#### 【暮らしにくさを抱えた人への支援について2】

金田先生 引きこもりにはさまざまな理由がある。学校教育のときは先生や保健師が介

入できるが、卒業するとなくなってしまう。精神障害や病気のことがあって外に出られない人など引きこもりには色々な理由がある。障害があると障害分野で関われるが違うと介入できない。介入したりしなかったりで皆が離れてしまい、結局誰もその人を支えられないことになる。社協も担い手であり支援の場であることを忘れてはいけない。

岡本氏 専門職として相談をどう受け止めていくか、広い意味で住民主体をどうつくっていくのか考える。細かい枝はあるが、それが大きな柱になる。5年間での重点項目、福祉分野で特にこれだと思えるものを考える。上牧で地域生活を送る上で課題となってきたことを出す。仮に引きこもりでも、何を考えるのか。働くことをキーワードにするのか。「引きこもりの人がいるらしい」というだけでは動けない。

高齢者の見守りだけでなく、地域にあるニーズを意識してもらおう働きかけがある。拒否的で地域の輪から外れていたり、排除されやすい人のニーズに目を向けてもらおう働きかけが必要なのでは。

植村氏 社協として、桜三会の世話人と気になる何件かにアプローチすることと町全体の計画としてはまた別の話。

岡本氏 社協に「どこに言っているのか分からない」という引きこもりの相談が寄せられてきていて、さらに小地域ネットワークでも引きこもりの人を知っているというなら、SOSが出しやすいアプローチが必要なのではないかな。

金田先生 引きこもりで困っているから何とかしてほしいと相談しにくいのではないかな。

岡本氏 発達障害で引きこもりになった人から話を聞いたことがある。引きこもるにも力があるとのこと。いろいろな引きこもりの人がいる。

金田先生 引きこもりの定義もあいまい。日数でも症状でも年齢別でもない。

岡本氏 この先、「ぷらっと」は多様な働きたい人の場となるのか。

金田先生 引きこもりの問題に特化するのではなく、生活のなかで生きづらさを抱えている人を地域でキャッチする、地域で考える、地域で居場所をつくる。気になる人はどんな人でもいい。どのような人がどれくらいいるのかを知る。自分でSOSを出さない人もいる。

社協としては、何件気になる人がいると聞くだけでなく、次にどうするかを考えないといけない。

#### 【今後について】

岡本氏 地域福祉活動計画に文章で書くと単純に「相談機能の強化」となるが、それを担う各職員が「強化とはなに」とイメージして従事していかないといけない。

議論してきたことの項目を社協として当面の方針として整理しておく、構想図、イメージ図が必要。どんな入り口、出口にするのか。地域でどういうニーズがあるのか整理する。

金田先生 次回は今日の「つどい」に参加したメンバーを拡大して行う。地域で起きてそうな課題で一番多い課題を選ぶのか。そういう様々な課題が起きていることをどうキャッチするのかを考えるのか。

岡本氏 シニアカレッジは意見を出し合いながら進めていく。

岡本氏 本日の「つどい」で得られたものは「ニーズの課題」や「活動の課題」などいろいろ混在している。確認できている課題を整理し、考えはじめているテーマについては強化していきたいことを見える化する。

シニアカレッジはその目的を整理しておく方がいい。社協として、つながりや担い手づくり等、福祉的なニュアンスを入れ、企画メンバーと共有しておく方がいい。

北嶋氏 ヒアリング結果の見せ方はどのようにするか。

岡本氏 このままでもいいが、ニーズは読み込まないと見えてこない。ニーズを地域特定せずに、上牧全体として図式化する。

植村氏 見せ方として2パターンある。

- ・小地域ネットワークがあるから見えてきた課題が一目で分かるもの。
- ・別表でニーズを類型別に整理したもの。

岡本氏 小地域活動を通して気付いていることとして整理する方がいい。その方が説得力がある。小地域ネットワークの意義をみせることで必要性を伝えることにもなる。

以上の作業委員会での議論を経て、以下のことが決定する。

①シニアカレッジについて

平成28年度の事業化を目指して10月中旬に企画会議を実施する。

②暮らしにくさを抱える人への支援について

11月2日に今回の「つどい」の参加者を中心に広く策定委員に呼びかけて会議を開催し、検討する課題について整理する。

③次回の作業委員会までに団体ヒアリングでの課題を整理し、次期計画で取り組むこと（骨子案）を整理しておく。

次回作業委員会：11月2日（月）16：00～20：00